辰巳会ゆかりの祥龍寺の歴史（その二）

〈たつみ誌68号よりの続き〉

菅　應峰

一、赤松円心の摩耶合戦

平清盛遷都（一一八〇年）と「旧天城文書」の文明元年（一四六九年）までの間に、赤松円心の摩耶合戦があって祥龍寺も、この動乱に巻き込まれたに違いないので、その概略を記して置きたい。

正慶三年（閏二月（一三三三年）赤松円心は護良親王の令旨を奉じて北條氏を討たんとし摂津赤松城に據る。明治四十一年五月高羽村字茶畑（現在の神戸大学構内）の地で、石垣城壕、井戸等整然たる一大城址を発見、この地が赤松城なるものと推定された。これによって太平記に残る摩耶合戦の條を見ると、まさに地理が符合する。

即ち六波羅勢は、初め八幡林から現在の水車新田の渓谷に入り、赤松城の西、土橋方面から攻撃しようとした。当時、水車新田大堂ヶ原（現在の大土平）は、一尾山十善寺の寺域であって、立ち並ぶ大伽藍を片端しから焼討ちして進んで来たのである。赤松円心はこれを見て、態と敵を難所に帯き寄せんと、足軽一、二百人を南麓に下して遠矢を射させて引上げた。寄手は勝に乗じて攻略を変え、五千余騎さしも険しき南の坂を人馬に息も継がせず、揉みに揉んで攻め寄せる。七曲りという岨しき路に来て寄せ手少し上り兼ねて支えたところ、赤松則祐南の尾崎（篠原村）に出て八幡林の敵を左側より掩撃した。篠原村城下口の地名は、現在の篠原中町あたりである。次に赤松範資一黨五百余人、一尾山より打って出たので、六波羅勢は大に敗北して城の麓より武庫川まで三里の間、人馬上が上に重り死して、行人道を去りあえず（道が通れない）と云う。高羽の南の地は戦場ヶ谷と称して残っている。

十善寺々記に「往者刀兵劫（戦い）之時、七堂伽藍七十三僧房盡帰灰燼矣」とあるが、大堂ヶ平の西、百米の地点にあった祥龍寺も、この時に兵火に無関係ではなかったであろう。大いに推測出来るところである。

二、若林家と祥龍寺

「旧天城文書」に記録されている文明元年から天正十九年の百二十二年間は、いわゆる応仁・文明の乱で、京都の大半が戦火に焼け、相戦った守護大名も中央の戦闘に追われている間に領国の守護代以下の武士が台頭して主人の所領・荘園を侵略した戦国の争乱期である。若林氏はこの時、都賀庄の公文下司（役員の身分）で、この時期に実力をつけて来た。この「旧天城文書」も実は若林家に伝えられたものであろうと云われる。

「西摂大観」に「若林家由緒書」が明らかにされているので、その中から祥龍寺関係と、一部興味深いものを掲載する。

「保元の頃（一一五六年）篠原村北山に荒熊武蔵守興定が城をかまえ、落城の後若林隼人尉範房茲に居城す」と云う。

「恐らく祥龍廃寺後の山嶺稍々夷か（辺鄙）な所、北山城址ならん」とあるので今の牛小屋山か伯母野の辺であろう。保元年間は清盛遷都より二十四年も前の事である。荒熊興定の落城は建武の頃とも云われるので、或は摩耶合戦と関係があるかどうか、又、天文年間戦國の初期に若林正秀、菟原合戦に負けて戦死し、その伯母が名残りに思って戦死の地に松を植えた。これが「摂津名所図会」にある余波松である。後、この原を伯母野と云った。篠原村の古老、乾俊次氏の話によれば、この松は明治・大正の頃まであって、毎年若林家がシメナワを張っていたという。

若林家は応仁年間（一四六七年）秀勝の時、篠原村字家東に慶隆寺を再建した記録もある。この慶隆寺は昭和二十年以後、高羽の光台寺と合併して現在は慶光寺となっている。

又、大阪城普請の時、若林正満、六甲より石材を出して功あり、これより村の南海岸一帯を大石と呼んだ。今後もし若林家、或は八幡神社あたりから祥龍寺歴代住職の書状でも発見されるならば、更に詳しい歴史が明らかになると思う。期待するところである。

三、江戸時代中興期の祥龍寺

次に「西摂大観」の記述に

――寺社吟味帳――

「広国山祥龍寺（中略）右者往古より有り来り開基年歴相知不申候（寺を開いた年は判明しない）寛永五年（一六二八年）に入院仕同二十癸未年迄住職覚玄、寛文八申年（一六六八年）より一夢と申す道心者堂守に差置五、六年羅在相果候以後地主文左衛門支配仕候」がある。

これによって考察すると「旧天城文書」に記録されている文明元年から天正九年までの三十年間と、寺社吟味帳にある寛永五年から寛文十二年までの四十四年間は、明らかに祥龍寺に住職が常住していたと思われる。寛文十二年に至って無住となり、以後は地主、文左衛門の支配となるが、その二十四年後の元禄九年に突然、防長二州の主、毛利吉広公が大檀越（今の檀家総代）となって、再び祥龍寺が興隆期を迎えるのである。

この間の事情を推測してみると次の様な事ではないか。

承応三年（一六五四年）中国より隠元禅師来朝、沈滞していた日本仏教界に一大センセイションを巻き起す。寛文二年（一六六二年）には宇治の黄檗山萬福寺を開堂、幕府も次第に隠元を重んじ、天皇及び公家の信望を得る。

この時、妙心寺派より黄檗山に転ずる寺院多くこの頃、祥龍寺も何らかの理由で萬福寺の傘下に組入れられ、黄檗山から監院として即宗和尚が管理したものであろう。この即宗和尚、及び鉄弾和尚の力で、毛利吉広公の帰依を得て再び禅林（禅宗の寺院）として盛えたに違いないのである。

先にあげた洪鐘鋳造の因縁は、徳川氏五代綱吉将軍の夫人鷹司関白教平公の息女贈一位信子の追福に侍女北爪氏が寄進とある。

鐘銘には「元禄十四年（一七〇一年）臨済正宗（正当孝教え）第三十四世開山嗣祖沙門鉄弾」の鋳造と記されている。

鉄弾和尚は五十年以上、祥龍寺に住職していたと見えて、宝暦年間（一七五〇年頃）若林平右衛門敏英が帰依して寄進した記録がある。「将軍家より寄附の宝器あり云々」というのもこの頃の事であろう。しかし、この繁栄も束の間で終り、一年後の火災に羅りて忽ち祥龍寺は堂舎灰燼となってしまう。

鉄禅和尚より四十年後の寛政十年（一七九八年）に出た「摂津名所図会」にはすでに「祥龍廃寺」として紹介されている。